

聖書：マタイ 23：13～28

説教題：わざわいだ

日時：2020年5月10日（朝拝）

イエス様は前回、群衆と弟子たちに、律法学者やパリサイ人たちについての警告の言葉を語られました。彼らがあなたがたに語る言葉に聞いても、その行いをまねしてはいけません！と。彼らはイスラエルの伝統的な教えに忠実な人たちで道徳的な人たちであると一般民衆から尊敬されていました。しかしその道は間違っている！とイエス様は大変衝撃的な言葉を語り始められました。

その彼らの問題は前回の箇所最後の12節にもう一度目をやるだけではっきりします。彼ら律法学者やパリサイ人たちの歩みは、一言で言えば「自分を高くする」という生き方でした。彼らは道徳的な人たちとして人々から尊敬されていましたが、5節に語られていたように、その行いは「すべて人に見せるため」でした。そして人々が集まる場では上座に着くことを好み、先生と呼ばれることを好み、お互いの間でステイタスを巡って競争する。それは天の御国の生き方と反対であることをイエス様は前回の箇所で述べられました。ただ一人の教師であるイエス様が心にかけていることは、人に仕えられることではなく、人に仕えること、奉仕すること。そして今やご自分のいのちさえも十字架に投げ出そうとしておられます。方向性が全く逆です。12節でイエス様が言われたように、もし私たちが律法学者やパリサイ人にならって自分を高くするなら、その人はやがて低くされます。一方、イエス様にならって自分を低くする者は、やがて高くされます。だから間違った道を行かないように！とイエス様は警告されたのです。

さて今日の13節以降でイエス様は、律法学者やパリサイ人たちに向かって直接語って行かれます。これは群衆の中に彼らが混じっていたということなのかもしれません。イエス様はここで「わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人」という言葉を合計7回、繰り返されます。「わざわいだ！」と訳されている言葉は強い悲嘆の意を表す言葉で、同じ言葉は11章21節の「ああコラジン、ああベツサイダ」という言葉の「ああ」と訳されている部分に使われていました。イエス様はそこでそれらの町々に臨むやがてのさばきを思って嘆かれました。またこのあと24章19節に出て来る「それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです」というところの「哀れです」と訳されている言葉も同じです。ですから今日の箇所の「わざわいだ」という言葉も、彼らにやがて

臨むであろうやがての刑罰を思って心痛めつつ発した嘆きの言葉と言えます。その言葉を発しながら、イエス様は律法学者やパリサイ人たちの問題を具体的に語って行かれます。これは大変厳しい言葉ですが、それは医者が出す正確な診断書のようなものです。それはこれに聞く者が、この光の下で自分自身を検討して正しい道に立ち返るためです。なお本来はここにある7つの「わざわいだ」を一緒に見て行く方が良いかと思いますが、全部を見ると長くなりますので、今日は6つ目までを見ることにいたします。最後の7つ目は来週、この章最後のエピソードと合わせて見ます。またこの7つをどう区分するか色々な見方があるかと思いますが、今日の6つは2つずつ3つのグループに分けて見て行きたいと思います。

まず一つ目としてイエス様は13節で、律法学者やパリサイ人たちが、人々の前で天の御国を閉ざしていること、自分自身が入らず、入ろうとする人々も入らせないことについて述べています。彼らが「入ろうとしない」という表現は、天の御国がすでに彼らの前に来ていることを前提にしています。そしてこの福音書から分かることは、天の御国はイエス様とともに到来していたことです。ところが彼らはそこに入らない。彼らは律法の専門家、イスラエルの教師たちです。多くの時間を費やして聖書を研究する人たちとして、旧約の預言がイエス様において成就していること、この方において天の御国が到来していることを誰よりも早く悟るべきでした。しかし彼らはこれに抵抗し、目をつぶります。彼らはメシヤの先駆者であるバプテスマのヨハネのメッセージにも聞かず、イエス様にも聞かない。それを心に留めず、むしろ後ろへ退いた。そればかりか他の人たちをもそのように導いていました。ガリラヤから来た人々、あるいはユダヤに住む人々の中には、イエス様の教えに喜んで耳を傾け、これを受け入れようとする人々もいました。しかしその中のある人々は律法学者やパリサイ人たちをイスラエルの教師として尊敬していました。その彼らがイエス様を信じず、あれはダメだ！という態度を取ることによって、まさにその人々の前で天の御国を閉ざしていたのです。自分も入らないし、入ろうとしている人々も入らせない。

2つ目の15節も同じです。律法学者やパリサイ人たちは改宗者を得るのに海と陸を巡り歩きました。その熱心それ自体は良いことです。しかし彼らによって改宗させられた人々はパリサイ人たちの理解に従ってユダヤ教の教えを受け取ることになります。改宗者とは、それまでユダヤ教の外にいた人々です。ですから教えられること以外にはユダヤ教のことを知りません。そこで彼らは教えられるままに、いわばパリサイ主義に改宗

してしまうのです。ここにその人を「自分よりも倍も悪いゲヘナの子にする」とあります。新しく信じた人は、たいていそれまで信じていた人々よりも熱心さを示すものです。こうして彼らはさらに悪いゲヘナの子、地獄に至る人を生産していることになるのです。

2つ目のグループは3つ目と4つ目の「わざわいだ」です。16節以降ではまず誓いの問題が取り上げられています。すでに山上の説教の5章33～37節で同じ問題は指摘されていました。イエス様はそこで「誓ってはならない」と言っておられました。それはそこで見ましたように絶対的に禁止したということではありません。この適切な使い方があること、ある場合にはそれは必要でさえあることを聖書自身、語っています。ただイエス様が問題にしたのは、彼らが誓いを乱用して、ある場合にはそれを絶対に果たさなければならぬが、ある場合はそうでなくても良いとする巧妙な区別を設けていたからです。誓いの形を取ることによるある種の利益を確保しながら、守らなくても罰を免れるという抜け道を作っていたからです。その具体的な例がここにあります。ここに言われていることが愚かであることは読んだらすぐに誰でも分かると思います。神殿の黄金にかけて誓う場合は重大だが、神殿そのものを指す誓いはそれほどでない。あるいは祭壇の上のささげ物を指して誓うなら、それは果たす義務があるが、祭壇そのものを指して誓った場合はそうでない、と彼らはしていました。彼らは様々な状況における誓いの問題を扱う中で、人々から質問を受けたり、アドバイスを求められる中で様々な規定を作っていました。そうして絶対に果たすべき場合と、そうでない場合の区別を設けて行きました。人間の教えが神の言葉に取って代わると、こういった愚かな結果が出て来ます。神の本来のみこころが後ろに投げやられ、代わって人間が決めた形式的なルールを守ることが重要だとみなされるようになるのです。

23節以降の4つ目の「わざわいだ」も同じです。彼らはいわゆる十分の一を細かく守っていました。旧約の律法では例えば申命記14章22～23節に「あなたは毎年、種を蒔いて畑から得るすべての収穫の十分の一を、必ず献げなければならない」と言われ、具体的に穀物、ぶどう酒、油の十分の一をささげるべきことが言われています。あるいはレビ記27章30節ではもっと包括的に「地の十分の一は、地の産物であれ木の実であれ、すべて主のものである」と言われていました。これに沿って律法学者やパリサイ人たちは、ミント、イノンド、クミンなどの十分の一もささげていました。イエス様はこれは愚かだとは言っていない。これは良いこと、適切なことです。問題は大小のバランスです。彼らはこういったことを几帳面に守りつつ、それよりはるかに重要な正義・あわ

れみ・誠実をおろそかにしていた。これは少し前に見た 22 章 34～40 節のイエス様の言葉に通じると思います。イエス様はそこで「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛すること」と「あなたの隣人を自分自身のように愛すること」、これが一番重要な戒めであり、律法と預言者の中心メッセージであるとされました。今日の箇所で言われている正義・あわれみ・誠実は、まさに隣人愛に関するものです。つまり彼らは十分の一をしっかり守っていることを誇りつつ、律法のエッセンスである隣人愛の戒めを無視していた。細かいことも大切ですが、より重大なことを無視するようでは本末転倒です。24 節のイエス様の言葉は、この彼らの姿をユーモアたっぷりに語った言葉です。ぶよもらくだも汚れたものとして避けるべきことが律法で言われていましたが、彼らのしていることは小さなぶよは一生懸命にこして除くのに、大きならくだは何も問わずに飲み込んでいるということ。これはもちろん彼らが本当にらくだを飲み込んでいたということではありませんが、彼らのしていることはまさにこのようなことだ！とイエス様は言っているわけです。小さなことにこだわりつつ、はるかに重要なことをいい加減にしている。

3 つ目のグループは 5 つ目と 6 つ目です。まず 25 節に「彼らは杯や皿の外側はきよめるが、内側は強欲と放縦で満ちている」とあります。彼らは 5 節で言われていたように、人に見せるために外側は整えますが、内側には注意を払いません。敬虔そうに見えるその内側には強欲、すなわち他人のものを奪い取って自分のものにしようとする欲望が満ちていた。また「放縦」は不道德な生活を自分に許すことです。他者から道徳的な人々と尊敬されつつ、実際の中身はと言うと、自己訓練などさっぱりしておらず、欲望に身を任せた生活をしている。外側と内側の大きいギャップ。6 つ目の 27～28 節もほぼ同じです。墓は良く世話をしている間は、すぐにそれと分かりますが、放置されると目立たなくなる場合もあったようです。地元にもとから住んでいる人でなければ、あそこに墓があるとは気づかない状態になっている。そんな中、祭りのためにエルサレムにやって来る人々は、その地域のことを知らず、誤って墓に触れてしまうかもしれない。すると民数記 19 章 14 節に従って、その人は 7 日間汚れることとなります。巡礼者が 7 日間、汚れた状態になっては大変です。そこで過越の祭りの前の月には、目立つように墓を白く塗る習慣があったようです。イエス様は律法学者やパリサイ人らは、この墓のようだと言われます。外側は白くてきれいでも、内側は汚れたもので一杯であると。28 節には「偽善と不法でいっぱいだ」と言われています。特に「不法」という言葉には大きいアイロニーがあります。彼らは自分たちこそ神の律法に従っているという自負心

を持っていました。しかし見て来た通り、彼らが実践し、人々に教えていたことは、神の御心から大きく外れていました。それは人間の解釈に基づく自分たちの勝手な教えであって神の法とは関係ありません。ですから不法と言われているのです。律法に従っているつもりでありながら、神の目から見るとそこにあるのは神の律法を退ける不法だけ。それが満ちている。

最後の7つ目は次回、見たいと思います。さて今日の箇所はどのようにまとめたら良いでしょうか。イエス様は天の御国と相容れない律法学者やパリサイ人たちの姿について具体的に指摘されました。では天の御国はこれらに対してどのようなものなのか、最後に短く確認したいと思います。まず1つ目と2つ目の「わざわいだ」に対して天の御国の福音の立場はどのようなもののでしょうか。律法学者とパリサイ人たちは、天の御国に入ろうとしますが、そこに入るための条件は何だったでしょう。それはイエス様の宣教における第一声に端的に示されています。4章17節に「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」とあった通り、それは悔い改めです。それはイエス様の先駆者であるバプテスマのヨハネのメッセージと同じです。3章2節に全く同じ彼の言葉が記されています。これは難しい注文ではなく、自らが罪人であることを認めて、ただ神の恵みにすがれば良いということです。しかしこれが律法学者やパリサイ人たちにとってはイヤだった。イエス様のこのメッセージに応答して、多くの罪人たちや取税人、遊女たちが神の国に入りました。律法学者やパリサイ人たちは、こういった人たちと自分たちが一緒に扱われるのが嫌だったのです。自分たちはよくやっている人間である。戒めを守っている人間である。人々から高く評価されている者たちである。彼らと同列に扱われては困る、しかし問われなければならないことは、本当に彼らは立派なのかということです。イザヤ書64章6節に「私たちの義はみな、不潔な衣のようです」とある通り、私たちの義は神の前に全く頼りないもの、むしろ反吐が出るような嫌悪すべきものです。イエス様はそのことを今日の箇所でも暴いておられるのではないのでしょうか。私たちは自分を高く見せるために一生懸命演技する必要はなく、むしろ貧しい自分をそのまま認めて良いのです。それを認めて悔い改めるところに、天の御国はただ恵みによって開かれるのです。

3つ目と4つ目の「わざわいだ」に対して福音が示す世界はどのようなものでしょう。律法学者やパリサイ人たちは律法を色々と解釈して細かいルールを沢山作りました。そしてそれを守る者が立派な者、敬虔な者であるとしつつも、結局は御心から外れていま

した。これは彼らが悔い改めを経て天の御国に入っている者ではないため、言い換えれば恵みの神と真に出会っていないために起こっている誤りと言えます。今日の箇所でも改めて教えられていることは、神の戒めは一つ一つ大切ですが、中でも「愛」がそのエッセンスであって、これに注目することが重要であるということです。私たちはその本質が愛そのものである神ご自身と出会うことによって、その方との生ける交わりに生きることによって、律法の真意を悟り、体験し、その実践を導かれて行くのです。律法はただ機械的・形式的に守るものではなく、私たちを恵みによって受け入れてくださった神との愛の関係、真実の关系到生きる中で悟り、理解し、味わい、行って行くものであることを覚えて、この中心ポイントをいつも中心に置いて他の様々な律法を理解し、神ご自身に似る歩みへと導かれて行きたいと思えます。

そして5つ目と6つ目の「わざわざいだ」に対してはどうでしょう。私たちのすべきことはただ外側をきれいに見せることではありません。イエス様は26節で「まず杯の内側をきよめよ。そうすれば外側もきよくなる」と言われました。私たちは自分の力で内側をきよくすることはできません。しかし福音におけるグッドニュースは、この私の内側が造り変えられることができるということです。聖霊が内に住んでくださり、この心を新しいものとしてくださる。そしてこの内側が変えられることを通して、それが外側にも現れるようになるというのが聖書の語るメッセージです。私たちにその力はありませんが、イエス様の十字架を通して内側がきよめられるなら、それは外にも現れて行く。実質的に変えられて行くという道が備えられているのです。

今日のイエス様の言葉に聞いて、もし自分の内に誤った歩み、誤った方向性があることを思うなら、自己弁護し、取り繕うのではなく、すべてをご存知の私たちのたましいの医者の前で柔らかい心を頂き、罪ある自分を認める者でありたいと思えます。神はこのキリストにあって私たちを天の御国へ招いてくださっています。これは悔い改めを通して入るところです。この道を通り、ただ恵みによって、天の御国に生かされる者とされたいと思えます。罪を赦されて、神との真実な、生ける関係に生き、この汚れた者が内側から変えられて行くことができるという恵みの福音、天の御国の福音に生かされる道こそを進む者とされて行きたいと思えます。